



GAUDETE

推進本部だより

カトリック広島司教区平和の使徒推進本部

2014-2016年度広島教区年間テーマ

チャレンジ 新しい福音宣教 わたしをお使いください
— 家庭へのチャレンジ —

「やがて死ぬ・・・」

11月は「死者の月」です。死者のために祈り、また、死者に神へのとりなしを願い、そして、わたしたちの死について黙想する大切な時です。

やがて死ぬけしきは見えず蟬の声
(芭蕉)

人はだれでも死を迎えます。遅い早いの差はあっても「やがて死ぬ」のです。人生の絶対の真理です。死に関するかぎり、だれにも例外はありません。

「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。」(ルカ12・20)

「人が見ることは 知恵ある者も死に 無知な者、愚かな者と共に滅び 財宝を他人に残さないといけないうこと」(詩編49・11)

蟬は、数年間地中で過ごし、地上に出てからは一週間ほどの短い命ですが、「今夜、お前の命は取り上げられようが、「やがて死ぬ」などという先のことも気にする様子もありません。死の直前まで、無心に、元気で泣き続け、力いっぱい生きて、天命を全うするのです。なんと見事な生き方か、なんと見事な死に方かと芭蕉は感嘆したのだと思います。

「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」(マタイ6・34)

死に対して不安や恐れを抱くばかりではなく、今日一日の命を神のいつくしみとはからいに委ねて、喜びの恵みに満たされましょう。

身体的な慈善のわざと精神的な慈善のわざ

「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」(ルカ6・36)。一人ひとりのキリスト者の意識と行いは、この責務によって試されます。(中略) いつくしみを受けた人の誰もが、他の人々のためのしるしや道具とならなければなりません。

それでは、どうすればいつくしみのあかし人となれるのでしょうか。それは、非常に苦勞して成し遂げるものでも、超人的なわざによるものでもないと思います。確かにそうではありません。主はささやかな行いから成る、非常に素朴な道をわたしたちに示しています。しかし、そうしたささやかな行いは、主の目にはとても大きな価値のあるものとして映ります。わたしたちはそれらの行いによって裁かれるとイエスが語っているほどです。実際、マタイによる福音書のもっとも美しい箇所の一つには、いつくしみのわざを直接、身をもって体験した福音記者によって記された、いわば「イエスの契約」と考えられる教えが記されています。イエスは、わたしたちが飢えている人に食べさせ、渴いている人に飲ませ、衣服のない人に服を着せ、外国人を受け入れ、病者や受刑者を訪ねるのは、ご自分にしているのと同じであると言います。教会はそれらのわざを「身体的な慈善のわざ」と呼んでいます。それらは、身体的なニーズを抱えた人々を助けるわざだからです。

一方、「精神的な慈善のわざ」と呼ばれる、七つのわざもあります。これらのわざはとりわけ今日、同様に重要なニーズに応えています。それらのニーズは人々の内面にかかわるものであり、しばしば大きな苦しみを生じさせます。ここで共通語にもなっている一つのわざを思い出しましょう。それは「煩わしい人を忍耐強く耐え忍ぶこと」です。煩わしい人は確かにいます。このことばは、苦笑してしまうようなささやかなことのように思われますが、深く愛する思いが込められています。他の6つの精神的な慈善のわざも同様です。それらのわざを思い起こしましょう。疑いを抱いている人に助言すること。無知な人に教えること。罪びとを戒めること。苦しんでいる人を慰めること。もろもろの侮辱をゆるすこと。そして生者と死者のために祈ることです。これらは日常的なことです。「しかしわたしも苦しんでいます」「神様が助けてくださいます。わたしには時間がないのです」。それではいけません。「わたしは立ち止まって、耳を傾けます。そして自分の時間を費やして、その人をなぐさめます」。これこそが慈善のわざです。それはその相手だけでなく、イエスに対してしていることなのです。

教皇フランシスコ、2016年10月12日の一般謁見演説(抜粋)

(カトリック中央協議会 訳)

主な教会暦(主日を除く)

11月01日 諸聖人(祭日)
11月02日 死者の日
11月09日 ラテラン教会の献堂(祝日)
11月20日 王であるキリスト(祭日)
11月30日 アンデレ使徒(祝日)



(ホームページ)